



文化財愛護
シンボルマーク

中竹矢後1号墳 長峯遺跡

昭和61年3月

松江市教育委員会

凡 例

1. 本書は、昭和60年度に松江市教育委員会が、いづみ建物株式会社の依託を受けて実施した中竹矢後1号墳と長峯遺跡の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、昭和60年7月16日から同年12月5日までの内、計65日間を要し、それにかかる経費は4,000千円を費した。
3. 発掘調査の組織は、次のとおりである。

委託者 いづみ建物株式会社 代表取締役 保野貞雄
受託者 松江市 松江市長 中村芳二郎
主体者 松江市教育委員会 教育長 内田栄
事務局 野津久夫（社会教育課課長） 岡崎雄二郎（文化係長）
吾郷雄二（文化係主事）
調査員 岡崎雄二郎 吾郷雄二 錦織慶樹（嘱託）
調査参加者 水野真吾 福田邦光 飯塚康行 青木昭夫 蔦谷宏
高階智也 西谷節子 角田ミヤ子 菅井ハル子 菅井志奈子
松浦登美枝 菅井麻恵 与倉恵子 角サナ枝

4. 発掘調査に際しては、株式会社坂本建築設計事務所、前田建設工業株式会社から多大な協力を得た。
5. 出土遺物については、鳥根県教育委員会文化課の松本岩雄、内田律雄、三宅博士、柳浦俊一、足立克己の諸氏の指導を得た。
6. 出土遺物および図面の整理は、主として吾郷雄二と錦織慶樹が行なった。
7. 本書の執筆、編集は、岡崎雄二郎が行なった。

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗栱、すなわち笄と雀の組み合せによって全体で軒を支える腕木の役をなす植物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 歴史的環境	2
III 調査の概要	5
1. 中竹矢後1号墳	5
(1) 遺構	5
(2) 遺物	7
(3) 遺物の検討	8
2. 長峯遺跡	14
(1) 遺構と遺物	14
(2) 遺構の検討	17
① 堅穴住居跡について	17
② 土壙墓について	17
③ 遺物の検討	20
① 堅穴住居跡関係	20
② 土壙墓関係	24
IV 小 結	27



第1図 調査地の位置

I 調査に至る経緯

今回の調査にかかる丘陵については、過去いくつかの開発計画があったが諸般の事情により具体化するまでには至らなかったようである。

ところが、昭和58年秋に至り、大阪市に本社をもついづみ建物株式会社がこの地一帯の山林約80,000m²を対象に「竹矢地区区画整理事業」を計画した。

かかる地域は、これまでの分布調査でいくつかの古墳や遺物散布地の所在することが判明していたが、その正確な地点や開発区域内に含まれるのか否か不明な点が多かった。

そこで、昭和59年4月11日付で分布調査の依頼を受けたことにより同年5月11日に設計監理者である株式会社坂本建築設計事務所、前田建設工業株式会社の方々と共に現地を踏査した。

その結果、開発区域内には、下表に記す4か所の埋蔵文化財包蔵地の該当することが確認された。

これら埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては次のような判断を下し、昭和59年5月21日付、松教社第145号をもって相手方へ回答した。

『長峯1号墳は、規模の大きい方形墳で中竹矢後2号墳と隣接した古墳群を形成しており開発区域の端に立地しているので可能な限り現状保存が望ましい。

又、中竹矢後1号墳は中規模程度の方墳、長峯遺跡は正確な範囲や性格が不明であり、いずれも開発区域内の中央部に立地し計画変更が不可能であれば事前に発掘調査を実施し、その結果に基づいて判断したい。

発掘調査の時期は、昭和59年度中の対応は出来ないので60年度以降に実施可能である。』その後の協議の結果、長峯1号墳は計画変更を実施し現状保存がはかられることになったが中竹矢後1号墳と長峯遺跡については設計の都合上現状保存が困難であるので発掘調査を実施することになった。

第1表 計画区域内埋蔵文化財包蔵地一覧

番号	名 称	所 在 地	形 状	規 模		
				長辺 (m)	短辺 (m)	高さ (m)
1	中竹矢後1号墳	松江市竹矢町1518	方 墳	15	13	1.5
2	〃 2号墳	〃 " 1517	〃	8.5	8.5	1.0
3	長峯1号墳	〃 " 1519-1	〃	19.0	10.0	3.0
4	長峯遺跡	〃 " 1520-2 1520-3	遺物散布地	20.0~	15.0~	-

II 歴史的環境

調査地の周辺には、第2表のとおり、多数の遺跡が所在しているが時代を追って概要を述べてみる。

まず縄文時代の遺跡としては、1.2.3が挙げられる。この内、1竹矢小学校校庭遺跡は、前期の爪形文土器を出土し、この地区で最も古い遺跡として注目される。他の2.3はいずれも晩期墳の粗製糞痕地土器を出土するものである。

弥生時代の遺跡は、中期の34布田遺跡が代表的である。ここでは、菅玉の生産にかかわる遺物も出土し、奈良期までの複合遺跡となっている。

弥生期の遺跡は、意宇平野を中心にまだ多数埋もれている可能性が強い。

古墳時代になると、大槻川南岸の丘陵上（10～14、16）や意宇平野北縁部の丘陵上（17～19）に、山雲部では大型の部類に入る古墳（前方後方墳や前方後円墳を含む）が築かれるようになり、この地域が、古代豪族にとってかなり重要な位置を占めたことが



第2図 周辺の主な遺跡

知られる。後期には、22のように、横穴墓の盛行が一部で認められる。

以上の両地域の中間地帯が今回の調査地になるが、やはり4、21、23～25、31、35のように古墳が点在している。調査例が少ないため時代の経過に従ってどのように社会が変遷していったのか不明な点が多い。

奈良時代には、意宇平野北側の台地上に、29国分寺、30同國分尼寺あるいはそれらに隣接する20瓦窯跡もあり、祭政上の重要な拠点となっていた。

第2表 周辺の主な遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物
1	竹矢小学校校庭遺跡	竹矢町	縄文土器、石斧、弥生土器、土師器
2	さっぺい遺跡	八幡町山本	縄文土器
3	保地遺跡	矢田町保地	縄文土器
4	的場遺跡	八幡町的場	土壙墓
5	遺物散布地	八幡町	土師器、須恵器
6	魚見塚古墳	朝鈴町矢出	全長62mの中期の前方後円墳
7	古墳	福富町	
8	福清神社裏遺跡	"	須恵器
9	明寺山古墳群	"	石棺式石室露出
10	手間古墳	竹矢町手間	全長約70m中期の前方後円墳
11	竹矢岩船古墳	竹矢町	全長約47mの中期の前方後方墳、舟形石棺、円筒埴輪
12	井ノ奥1号墳	矢出町井ノ奥	一辺35×40m、高さ4.5m円筒埴輪、形象埴輪
13	荒神畠古墳	矢出町	もと一辺30m前後の方墳か、中期、円筒埴輪、滑石製有孔円板
14	石原古墳	西岸出町	一辺40m、高さ7.5m、昭和54年6月6日国の史跡に指定
15	平所遺跡	矢田町平所	6世紀前半頃の埴輪窓跡 玉作工房跡1、壁穴住居跡3、溝状遺構2
16	井ノ奥4号墳	矢田町井ノ奥	全長57.5mの中期の前方後円墳、空濠と外堤をもつ
17	上竹矢古墳	竹矢町上竹矢	堅穴式石室 深さ20～25cm 内法長1.7m、幅20～45cm
18	上竹矢7号墳	"	前方後円墳 全長59m 他に方墳6基あり

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物
19	中竹矢古墳	竹矢町中竹矢	
20	出雲国分寺瓦窯跡	"	焼成室の奥半部が遺存 高さ1.2m、横幅2.24m
21	古墳	竹矢町	組み合わせ石棺、鉄劍
22	武内神社境内横穴群	竹矢町中竹矢	
23	迎接寺裏山古墳群	八幡町	前方後円墳1基、方墳2基
24	古墳	"	19.5×15m方墳
25	"	"	16×11m方墳
26	遺物散布地	"	古式土器
27	"	"	須恵器
28	古墳	"	7×7m方墳
29	出雲国分寺跡	竹矢町寺領	南門、中門、金堂、講堂、僧房を一直線に並べた東大寺式の伽藍配置
30	出雲国分尼寺跡	竹矢町中竹矢	礎石建物跡、築地状造構、溝状造構
31	才ノ峰古墳群	竹矢町才ノ峰	前方後方墳1基、方墳1基
32	才ノ峰遺跡	"	奈良、平安時代の割立柱建物多数
33	護山古墳	八幡町	
34	布田遺跡	竹矢町石橋外	弥生中期の菅玉製玉関係遺物 弥生～奈良の建物跡
35	觀音寺古墳群	八幡町	方墳3基
36	長塚遺跡	竹矢町	弥生中期末～後期前葉の堅穴住居跡1 平安時代の土壤基1基
37	中竹矢後1号墳	"	一辺14.2mの方墳

III 調査の概要

1. 中竹矢後1号墳について

標高24.5m前後の南北に延びた低丘陵上の突端部に立地している。所在地籍は、松江市竹矢町1518番地である。

測量したところ、一辺15.5m、高さ0.75～1mの中規模程度の方墳と思われた。墳頂部には、中心部から東部へ幅1～1.3m、長さ11mにわたって深さ27cmの溝が認められ、その部分が盜掘を受けているのではないかと思われた。

古墳の南部つまり丘陵基部と北部の丘陵突端部には古墳の裾部の線が明確に認められたが東部と西部については明瞭な線は認められず自然丘陵と変化のない斜面となっていた。

南部については上端幅3m、基底部幅1.5～2m、深さ50cmの空濠が認められた。

調査したところ、一辺14.2mの方墳で、北部33cm、南部空濠付近で73cmの明褐色粘性土の地山を切削加工し、さらにその上に盛土を施したものであることがわかった。

盛土は墳裾で30cm、墳頂部で45cmあり、上部が淡黄褐色の砂質ブロックを10%含む赤褐色粘性土、下部が赤褐色粘性土を25%含む淡黄褐色砂質土層となっていた。

南部の空濠は上端幅2m、深さ73cmを計り、表土の下は厚み26cmの褐色土層が堆積していた。

(1) 遺構について

主体部については、盛土層及び地山面をかなり入念に精査したが、結果的には全く検出出来なかった。

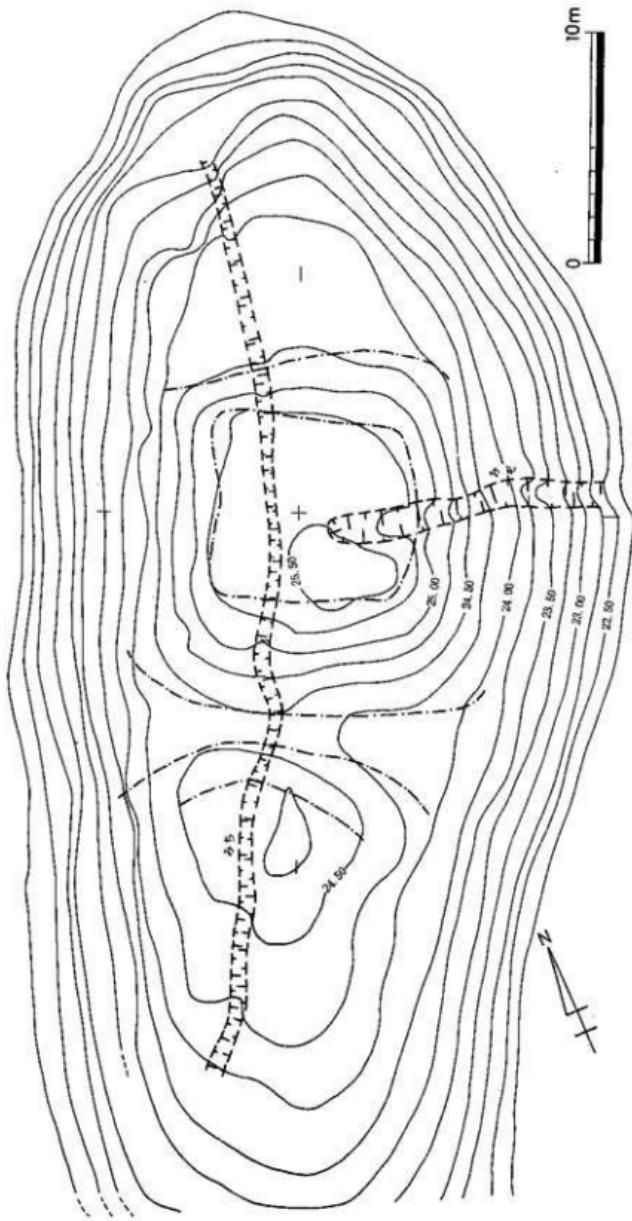
盛土層を取り除いた下部は、暗褐色土の有機質土層が15cmあり、その下方は、明褐色の硬い粘性土となっている。

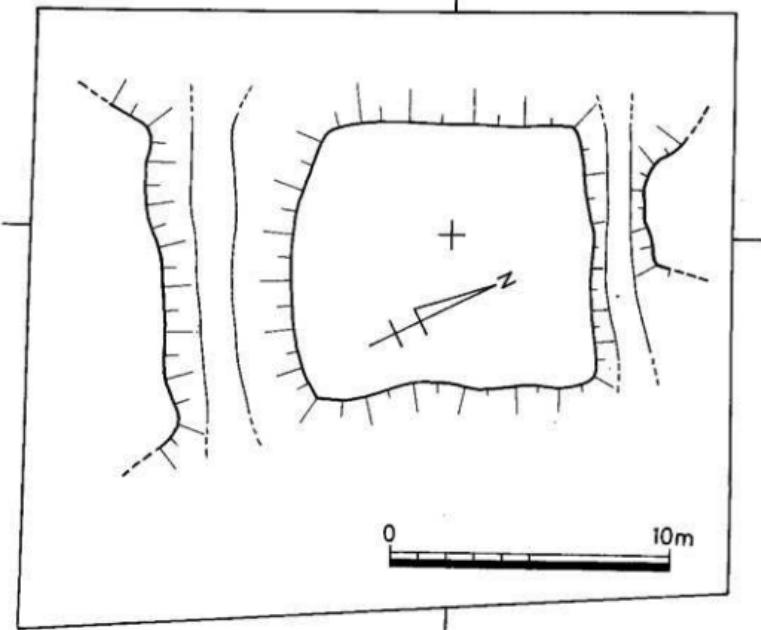
これは、古墳を構築する際に旧表土層が取り残されたことによるものである。

古墳の北方、丘陵先端部には5×8mほどの平坦面があり遺構の存在が推定されたが調査の結果、表土は厚み20cmほどでその下部は一様に地山面であり何ら遺構は確認されなかった。

埋葬施設があったとするならばすでに流出した盛土層の上部にあったのか、あるいは墳頂部から東方へ延びた攪乱の溝部分にあったのかも知れない。

第3圖 中竹矢後1号堆積丘測量圖





第4図 調査後平面図

(2) 遺 物

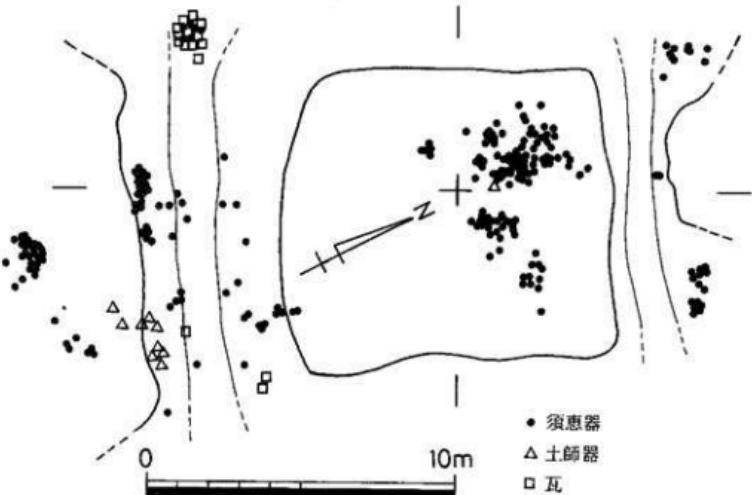
主体部である埋葬施設が確認されず、直接本古墳に関係する遺物の出土は皆無であった。

出土遺物は、南溝中出土のものと埴丘あるいは埴堀出土のものに区分される。

まず溝中出土のものは、須恵器、土師器、瓦片、かまと片がある。須恵器には、山陰Ⅲ期壺蓋の受部(第6図4)、回転糸切底の壺A、壺B(第6図15、16、18)がある。その他、甕片や、二方透しの高壺の頸部もある。土師器は、単純口縁の壺の口縁部の破片やスヌの附着した甕の体部の破片が認められる。

瓦類は、20片がまとまって出土した。(第7~9図) 瓦斗瓦と平瓦の破片で10種類に分類でき、完形品になりうるものは全くないので当初から破片を持ってきて投棄したとしか考えられない。

これらの遺物の出土位置は、溝の堆積土の上、中層であり、基底部からの出土は全く



なかった。

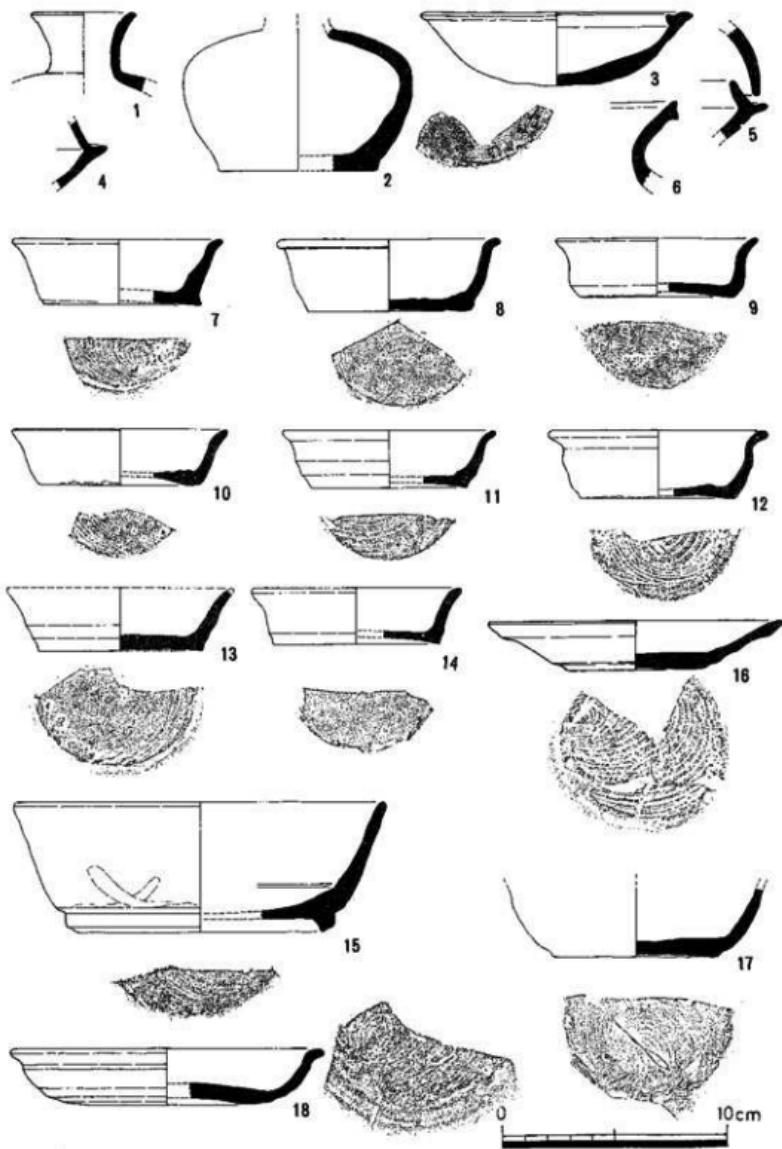
次に、墳丘上あるいは墳裾からの出土遺物は須恵器の壺A、壺B、壺、山陰Ⅲ期の盃杯、同Ⅳ期の壺身、三方透しの高杯及び黒曜石片である。（第6図1～3、5～14、17）

これらの遺物の出土状態は、表土直下あるいは、地表面に近いところからも発見されているが、盛土層が30～45cmと比較的浅く、木の根などにより移動した可能性も強いので、原位置を保っているものは少ないのでないかと思われ、むしろ、より高い位置にあったのが盛土層中へ食い込んでいったと考えた方がより自然であろう。

(3) 遺物の検討

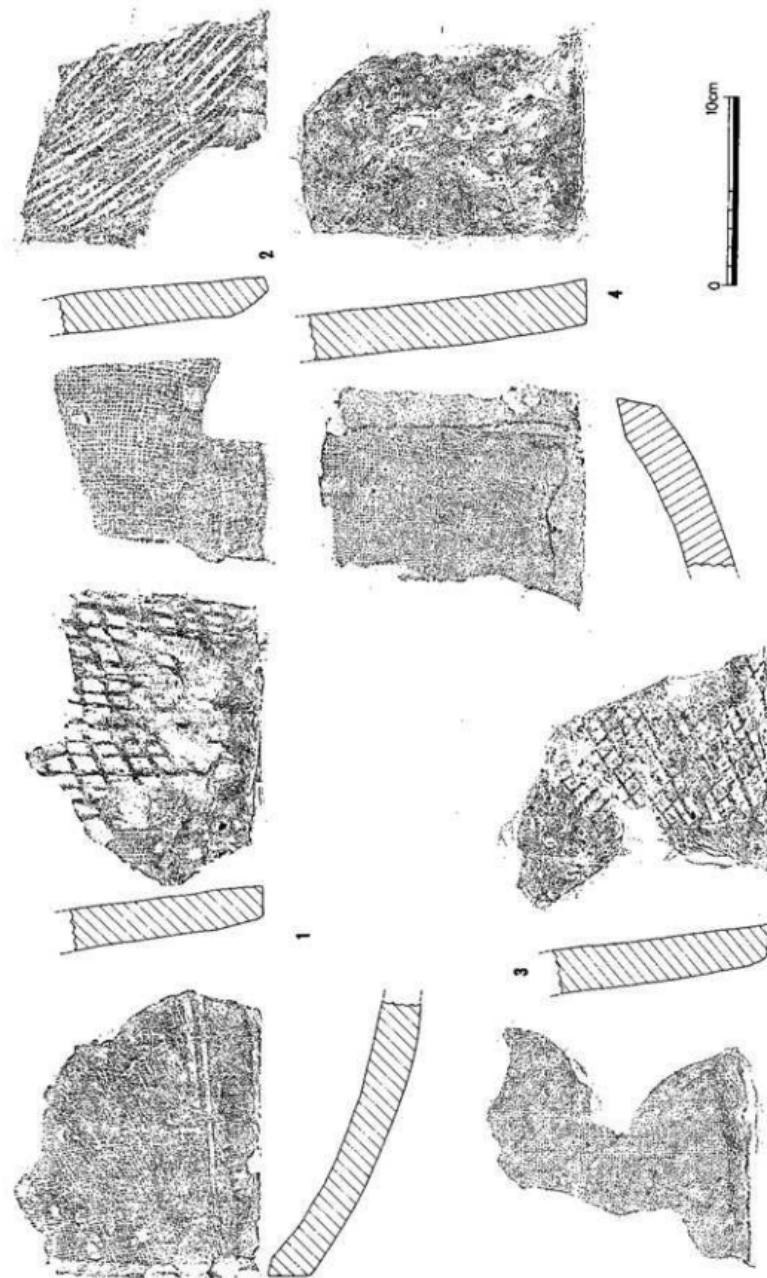
これらの遺物の年代観を考えてみる。まず、山陰Ⅲ期の壺身の内第6図4に示すものは立ち上がり部分の厚みがうすく、高さもあるのでⅢ期としてよい。又、第6図5に示すものは壺身の立ちあがりがやや分厚くなり、高さも低いのでⅢ期でも後半に入るものであろう。第6図3は、立ちあがりが受部より低く、短小化したものでⅣ期でよい。

壺Aとしたものは無高台の壺で、直径9～10cmの間、器高2.5～3cmの間の均一化したもので、口縁端部がいずれも外反する傾向のものである。このような特徴的な器種は昭和59年度に島根県教委が調査を実施した、松江市山代町の「四王寺跡」^{注1}でも出土しており、報告書では、柳浦編年のⅣ期に該当するものと推定されており本古墳のものもほぼ同じ頃のものと思われる。

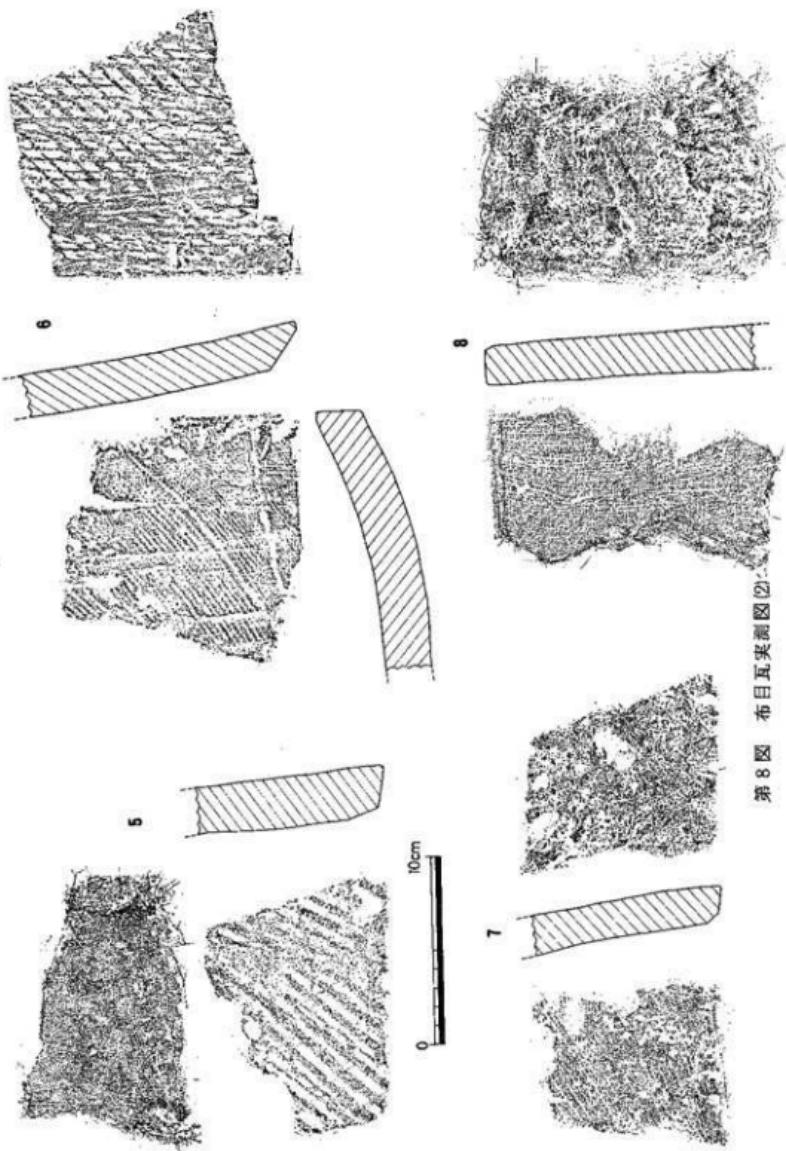


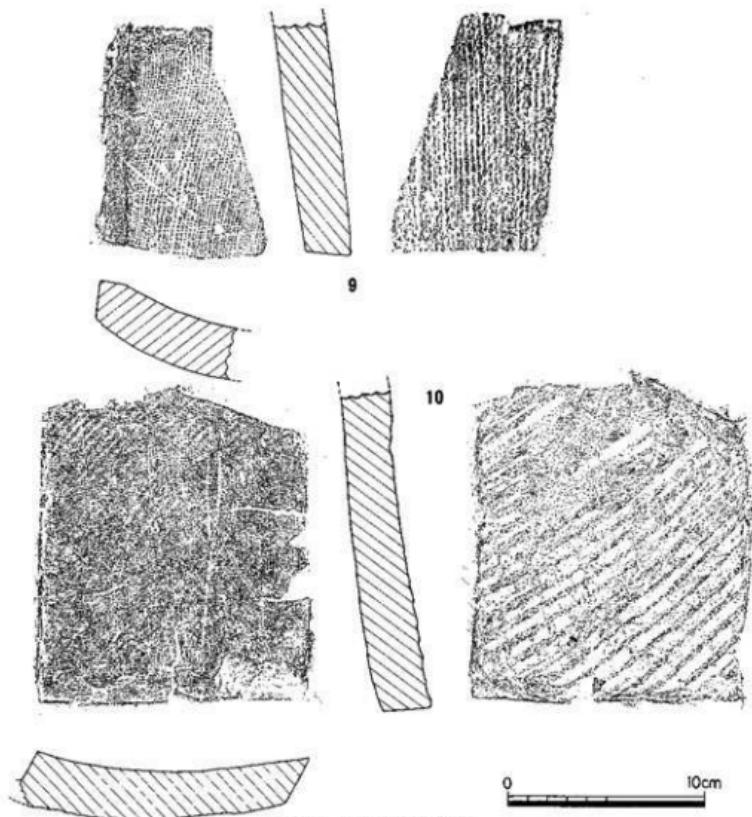
第6図 中竹矢後1号墳出土遺物実測図

第7図 布目瓦実測図(1)



第8图 布目瓦实测图(2)





第9図 布目瓦実測図(3)

第3表 瓦の観察表

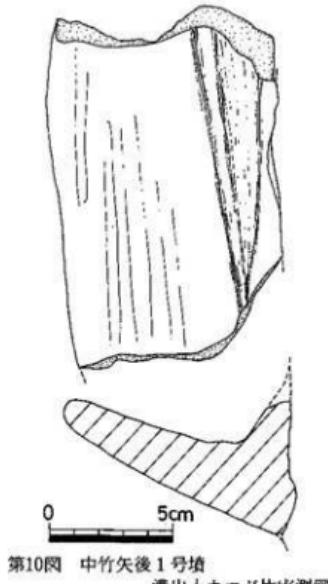
番号	種別	厚み	凹面の調整	織糸数(1cm平方)	凸面の調整	造瓦法
1	平瓦	2.1(cm)	布目	8×7	斜格子	一枚造
2	"	2.0	"	6×5	斜線	"
3	"	2.3	"	8×9	斜格子	"
4	"	2.5	"	8×5~7	"	"
5	"	2.7	"	計測不能	斜線	"
6	"	2.2	"	6×8	斜格子	桶巻造
7	"	2.0	"	7×9	斜線	一枚造
8	"	2.2	"	8×7	不明	"
9	"	2.6	"	7×5	繩目	"
10	熨斗瓦	2.5	"	7×8	斜線	"

瓦については、熨斗瓦が1枚ある他は全て平瓦片であり、おおよそ平安時代のものと考えられる。^{注3}

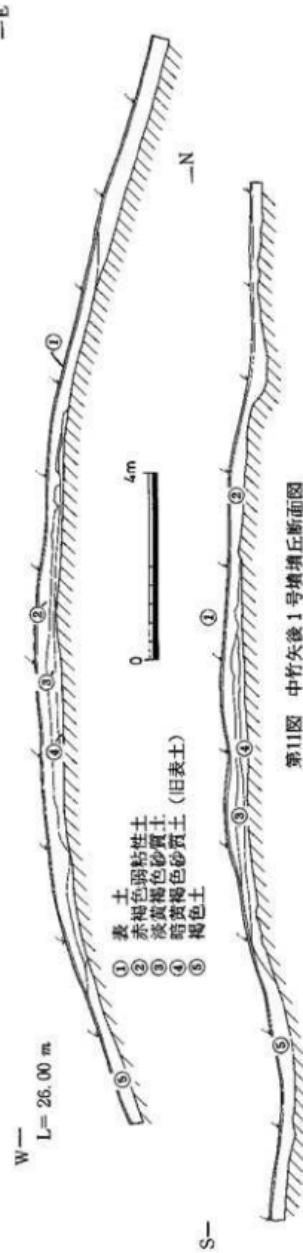
このように考えてみると、溝中あるいは埴堀や埴丘上から出土した遺物は、6世紀後半頃から8～9世紀代のものまでかなり年代幅があり、どう考えてよいのか判断に迷う。

あえて想像をたくましくすれば、墳墓であるという認識が、古墳構築以後もかなり継続して伝承されていたことにより、後世何度か墓前祭のような祭儀が執り行われ、その際あるものはそのまま、あるものは忌みけがれたものとして故意に破碎され、投棄された結果によるものではなかろうか。

こうした古墳の時期と違う、新しい段階の土器を埴堀あるいは埴丘から出土する例は、松江市坂本町の細曾1号墳^{注4}にも見られ、その他の古墳の調



第10図 中竹矢後1号墳
溝出土カマド片実測図



第11図 中竹矢後1号墳断面図

齊例でも古墳の埴輪や周辺部から糸切底の坏類の出土のみられるものがあるので、ただ単に投棄したと考えるのか、もう少し深い意味があるのか今後の検討課題であろう。

2. 長 峯 遺 跡

標高18m前後の北に延びる低丘陵上に立地する。所在地籍は、竹矢町1520-2、3、7である。

以前分布調査した折り、丘陵尾根部において、土師器の細片を採集していたのでその地点を中心ぐリッドを設定し調査した。

その結果、中央部及び北部においては表土の厚み5cmで、その下は全て黄褐色の砂質土となり地山面と思われ、遺構は全く検出されなかったが、これはもと畠地で耕作され搅乱を受けた結果であろう。

南部については高さ0.5mの段があってさらにその南側は自然の尾根となっているが段付近はさらに20~30cmほど周囲から高くなってしまっており古墳の南半部が遺存しているものと思われた。

(1) 遺構と遺物

段付近を掘り下げたところ、段直下の地山面において直径30cmの柱穴と思われるピットが認められさらに長方形土壙となるような掘り方の一部が検出された。この長方形土壙の上部堆積土層から東側にかけての堆積土層中には、多量の炭化物が含まれており、特に下層及び地山面においては焼土もあって当初窯跡とも思われたが、精査の結果、さわわたし4.2mの円形の掘り込みが確認され住居跡(S101)であることが判明した。

この住居跡は、壁際に幅7~8cm、深さ5cmの浅い周溝を穿ち、主柱穴4本と中央ピット1本を有する。

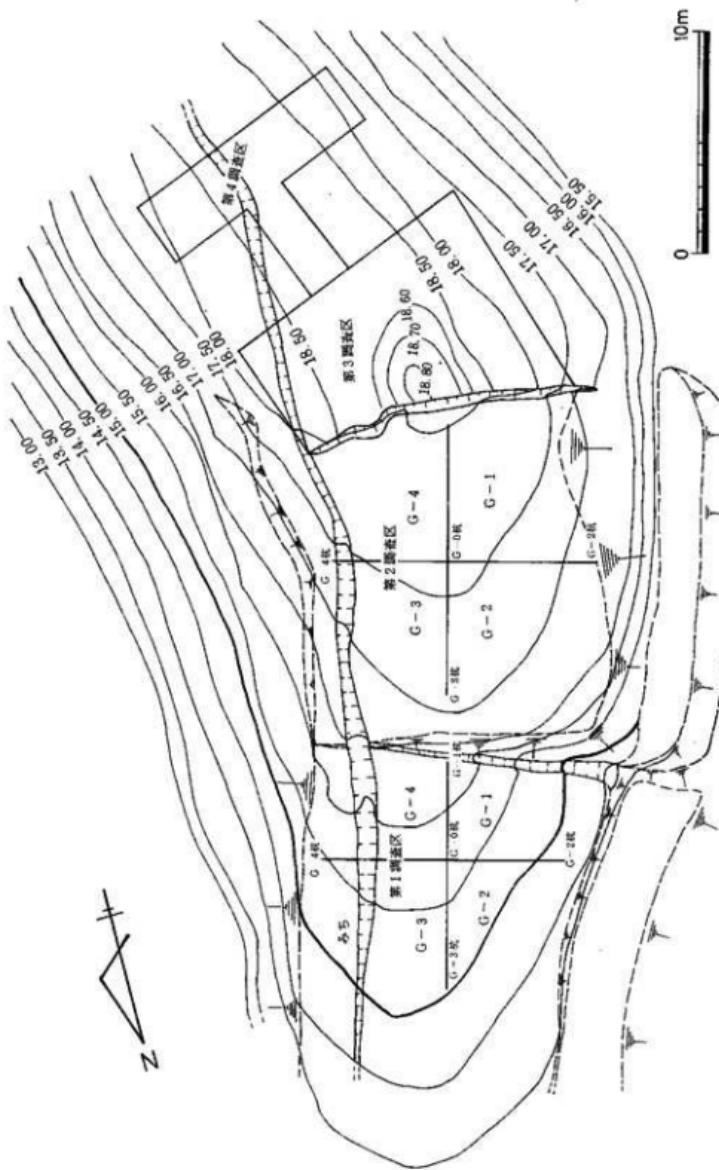
さらにこの住居跡の南部を掘り進めたところ、住居跡から約1.7m離れて、南東部に幅1.9m、深さ30cmの溝(SD01)が、又南西部に幅0.6m~1.1m、深さ10cmの溝(SD02)がそれぞれめぐらされていることが分かった。

南西部の溝(SD01)は、北方へ屈曲したあたりで消失していたが、南東部の溝(SD01)は、北方へ屈曲した後、直線的に9mほど続く段となり、その先は消失していた。

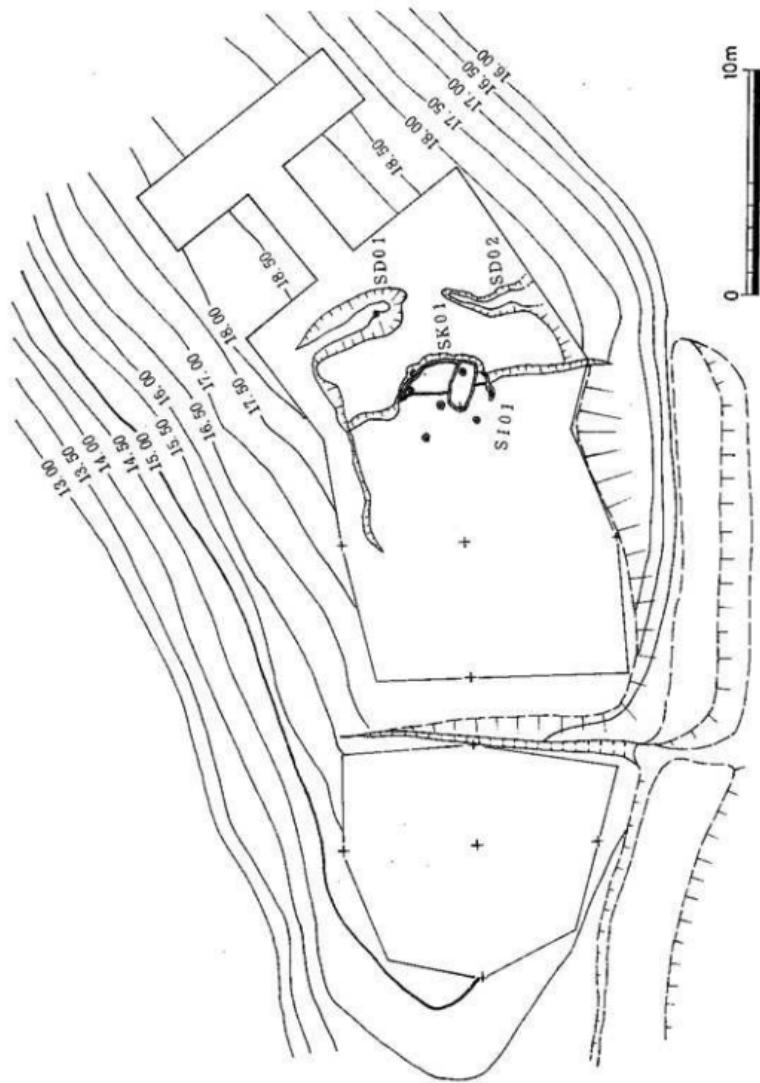
この溝中の底部からは、弥生時代の七器が点々と出土した。

一方、前述の堅穴住居跡内の西側において長方形土壙の一部が確認されていたが発掘した結果、長さ2.2m、幅1.1m、深さ60cmの隅丸長方形墓壙で内部には直径5~40cm程度

第12图 长丰遗址调查区分布图



第13图 长丰地脉调查成果图



の礫や転石が入っていた。

墓壇内からは、副葬品と思われる須恵器の壺や土師器の壺、棺に使用されたと思われる鉄釘が出土した。

(2) 遺構の検討

① 塗穴住居跡について

直径4.2mの円型住居跡であることが判明したが、こうした円型住居跡の例は、鳥取・阿弥大寺2号住居跡（弥生後期）、鳥取・大栄町後ろ谷遺跡中2号住居跡（弥生後期）、鳥取・大栄町上種第5遺跡中19号住居跡などに見られる。規模は、通常のものよりやや小さいようである。

住居跡の床面から35cm上層までには炭化物と焼土塊を多量に含んでいたがこれは住居が火災のため消失したことを物語っている。こうした罹災例は、鳥取・青木遺跡中HS131、同HS143号住居跡、鳥取・大栄町上種第5遺跡中10号、14～16号住居跡^{注8}で確認されている。^{注9}

周囲の4本のビットは、深さ46～54cm、直径30～40cmを計り主柱穴である。中央ビットは深さ20cmと浅く磁石や土器片を含んでいたので主柱穴とは考え難いが、かといって焼土も認められなかったので炉跡に関連したものとも思えない。それ以外の用途に供したビットであろう。

住居跡の南部には、約2mほど間隔をおいて尾根の東部と西部に溝がめぐらされていたがこの溝は、出土土器の年代観から塗穴住居とはほぼ同じ頃のものと考えてよいので住居を営んでいた際の排水用の溝と思われる。

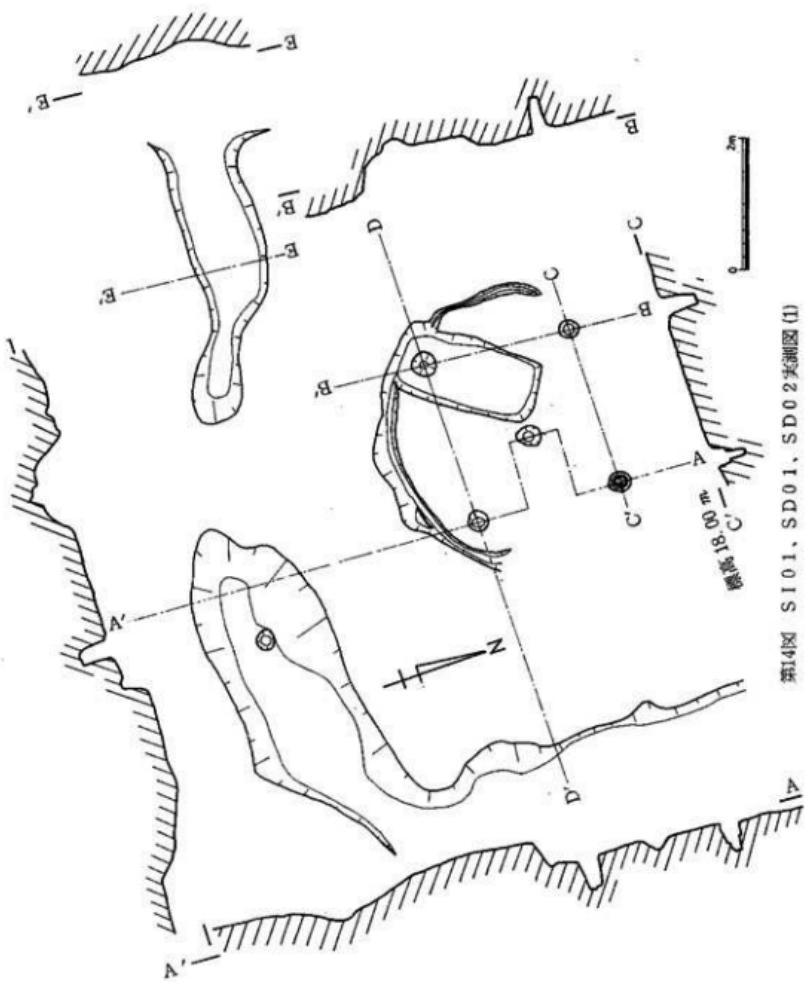
こうした溝の存在する例は、島根県松江市の勝負遺跡中SI03、同SI04、島根県鹿足郡六日市町の前立山遺跡SI16、同SI19（いずれも弥生後期末～古墳時代前期）などにみられる。^{注10}

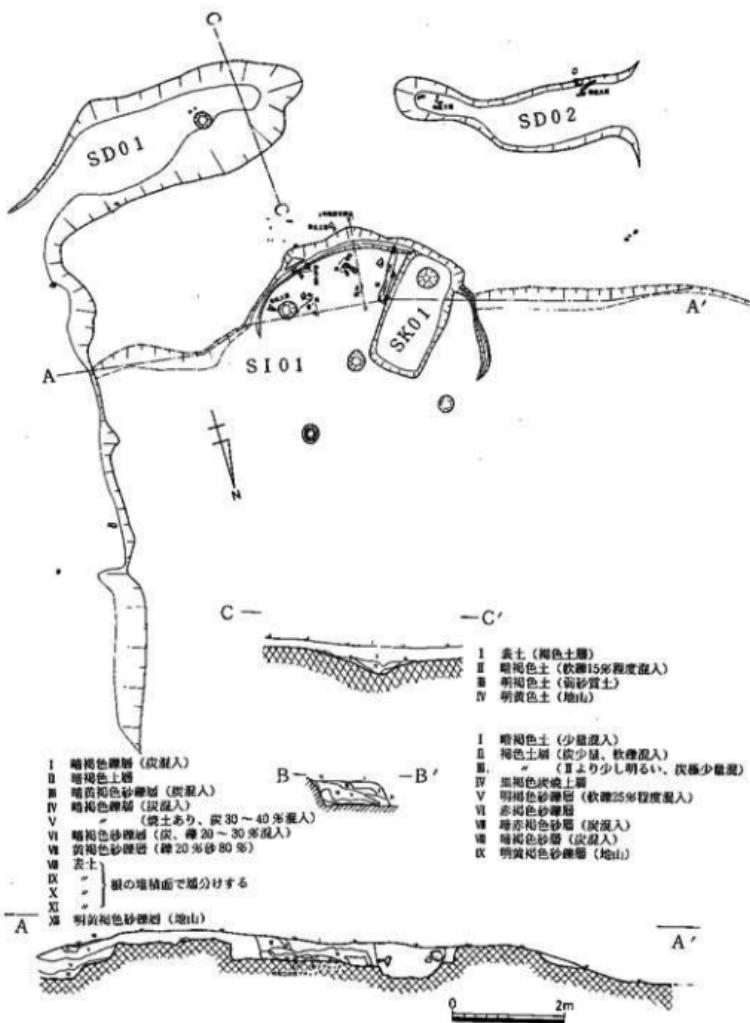
② 土壙墓について

塗穴住居を掘り込んだ形で検出されたこの土壙は内部に副葬されていた土器の形態からほぼ平安時代のものである。内部に鉄釘が計6本以上出土したがその位置は両小口と中央部に集中し壇内のかなり上部から出土している。これは、木棺に打ち付けた鉄釘であろうと思われる。

さらに直径5～40cmまでの礫、転石が大量に出土したが、これは木棺の周囲に詰めたものであろう。こう考えてくると、この土壙墓の作り方は、まず長さ約2.2m、幅約1.1

第14図 S101、SD01、SD02測量図(1)





第15図 SI01、SD01、SD02実測図(2)

m、深さ60cmの隅丸長方形の掘り方を掘った後、底面に礫、転石を敷き、その上に長さ（推定）1.6m、幅（推定）50cm、深さ（推定）30cmの鉄釘を打ち付けた木棺を置きさらに棺の側面や上部に礫、転石を詰め覆土したものであろう。

(3) 遺物の検討

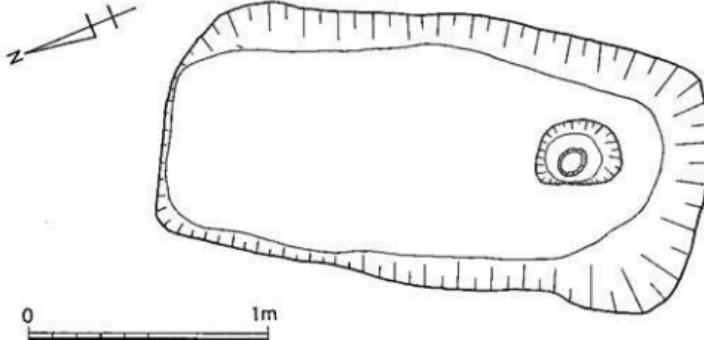
① 墓穴住居跡関係

弥生時代の遺物は、住居跡の床面から、1、2（第18図1、2）中央ピット（P1）内からは、3、4、5（第18図3、4、5）が出土。一方、西溝からは6（第18図6）が出土している。

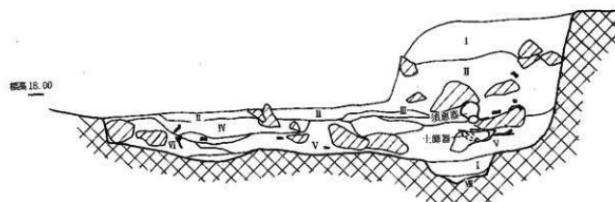
その他、実測図に示さなかった土器片は、第15図のとおりSD01（東溝）やSI01の南側地山面からも出土している。

1は、高壇の壇部口縁で端部は、幅1.3cmほどの平坦面を呈し、2.5cmほど垂直に下がったあと、くの字形に屈曲していく。外面には、4条の太くて浅い凹線文を施しススが付着している。口径は、不明だがかなり大形で30cm近くになるものと思われる。同様の體体は、SD01からも出土している。器内面は横ナデし、外面の調整は不明。全体に明褐色を呈する。器厚は、1～1.2cm、端部1.55cmを計る。

2は、壺か甕の頸部から体部の上半部にかけての破片である。頸部には、幅1.5cm高さ1cmほどの突帯を設け斜め方向にだ円型の刻み目を付ける。その深さは、およそ3ミリを計る。胎土は、やや粗で1ミリの砂粒をやや含み、全体に明褐色を呈する。器厚は1.2cmを計り、一部ススが附着している。

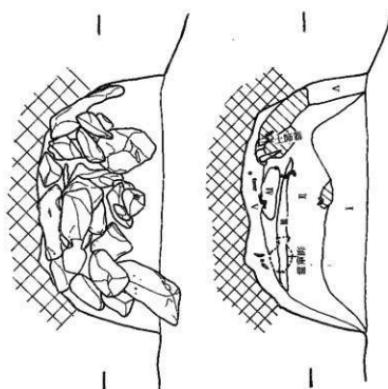
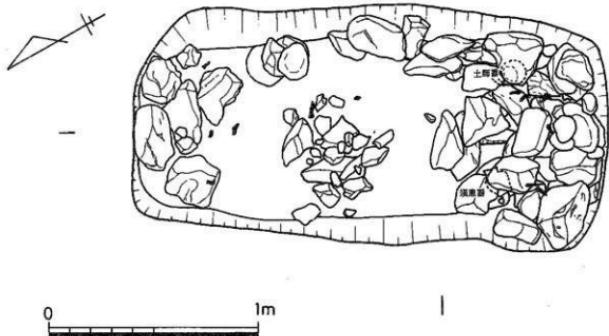
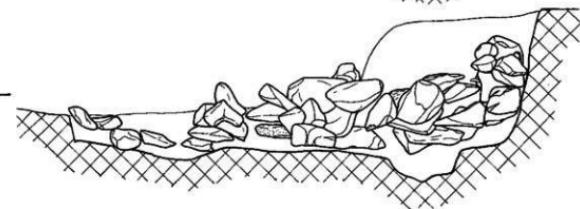


第16図 SK01 掘り方平面図



- I 暗褐色土層 (炭、礫少量混入)
- II " (炭の量I層より多い為にI層よりやや暗い)
- III 灰褐色砂質シルト層
- IV 暗褐色砂礫層
- V 褐色砂礫層 (炭、小砾20%混入)
- VI 黄色土層 (小砾、地山ブロック少量混入)
- VII 黄褐色土層
- VIII 茶褐色土層 (極少量炭混入)

* 黒塗りしたのは鉄釘



第17図 長峯遺跡SK01実測図

3は、高坏の接合部である。4条の細い沈線を施しその上下は、細かいタテ方向のクシ目で調整している。

沈線部分で直径は、6cmを計り、接合部は、4cm以上のかなり分厚いものである。胎土は、1ミリの白色砂粒を多量に含み、外表は、明褐色、内側は灰褐色を呈する。

4は、高坏の脚部で、3と同一個体と思われる。脚端径12.3cm、残存高4cmを計る。脚端部は、厚くなり1条の太い凹線を施す。一部3ミリ幅の粘土を貼り付けて2条の凹線文を施している。上方に向けては、内傾し、外面はタテ方向のハケ目調整、内面は、脚端部から3cm上方まで横方向のハケ目調整、その上は、横ナデ調整を施す。外面は、明褐色、内面は灰色を呈する。

5は、淡黄色安山岩質の大型の砥石である。長さ23cm、幅10cm、厚み7cm余りを計る。基本的には、上面と両側面の3面を幅広く使用しているが、その中間部にも面取りを施したような感じで3面の幅の狭い面がありそこも使用している。

6は、甕の口縁部から、体部の上半部にかけての破片で、頸部から口縁部に向けては、くの字形に屈曲し、口縁端部は、上方へ拡張し2条の凹線文を施す。口径13.9cm、残存高8cmを計る。体部の器厚は4ミリを計り砂粒は1ミリまでのものを若干含む。

外面は横ナデ、内面は頸部から上を横ナデ、以下をヘラ削り調整している。内外面共に黄褐色を呈する。

7は、大型の甕の上半部で、体部は直線的に下降し、厚み5ミリを計る。頸部から口縁部にかけてはくの字形に屈曲し、端部は、肥高して4条の凹線文を施す。頸部直下には1~1.5ミリ幅の5本単位の方形彫齒状の工具による羽状文を刺突する。砂粒は1ミリ前後のものを多く含み黄褐色を呈する。外面は横ナデ調整を施すが内面の調整は不明。口径は、30cm以上になるものと思われる。8は土壤墓周辺の表土から出土したもので弥生土器の底部である。

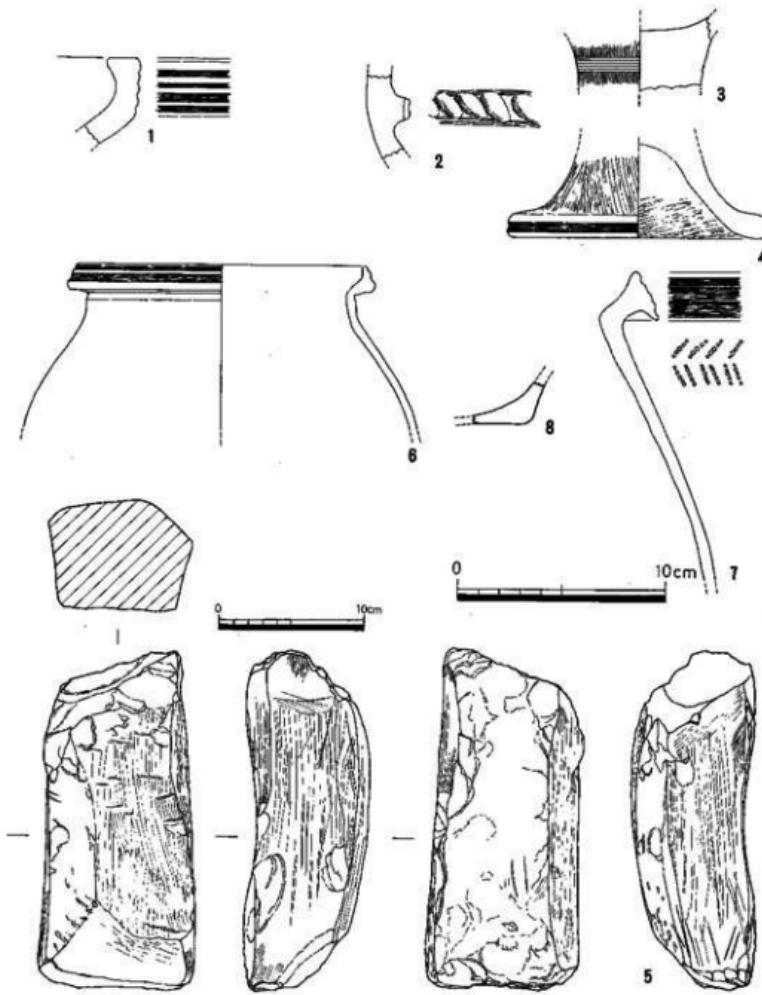
以上は、堅穴住居と溝に関係した遺物であるが、この内、2は頸部に刻み目の突帯文を施しており、弥生時代中期の様相の強いものである。

又、7は松江市友田遺跡の貼石方形墓北溝出土品や、邑智郡瑞穂町順庵原1号墳丘墓のストーンサークル周辺の出土土器に類似しており、弥生時代後期前葉頃と推定される。
注12

注13

その他、1、3、4、6も口縁部付近の器形などからやはり弥生時代後期前葉頃に推定できる。

これらのことから、この住居跡と溝は、弥生時代中期末から後期前葉頃にかけて使

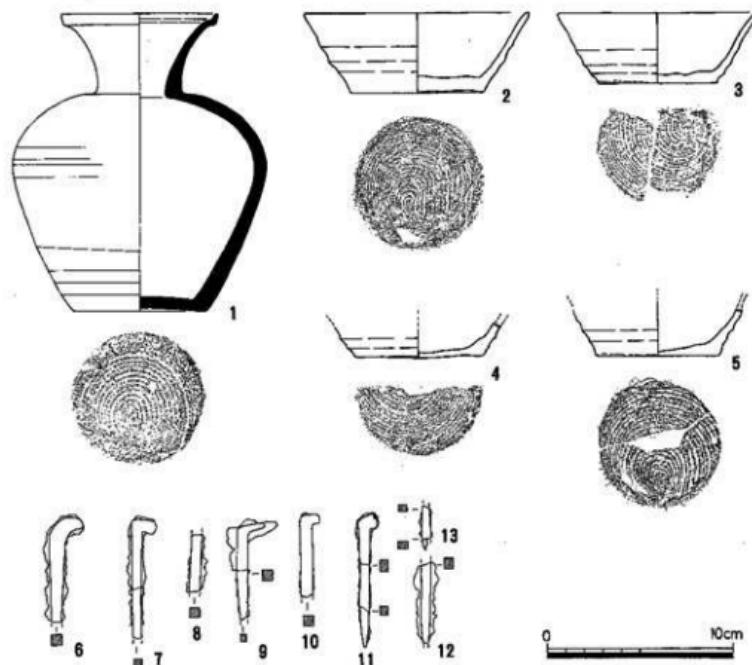


第18図 長峯遺跡堅穴住居内出土遺物実測図(1)

用されたものと考えられる。

② 土壙墓関係

墓横内からは、横底から浮いた状態で須恵器、土師器、鉄釘が出土した。(第19図
1~13)

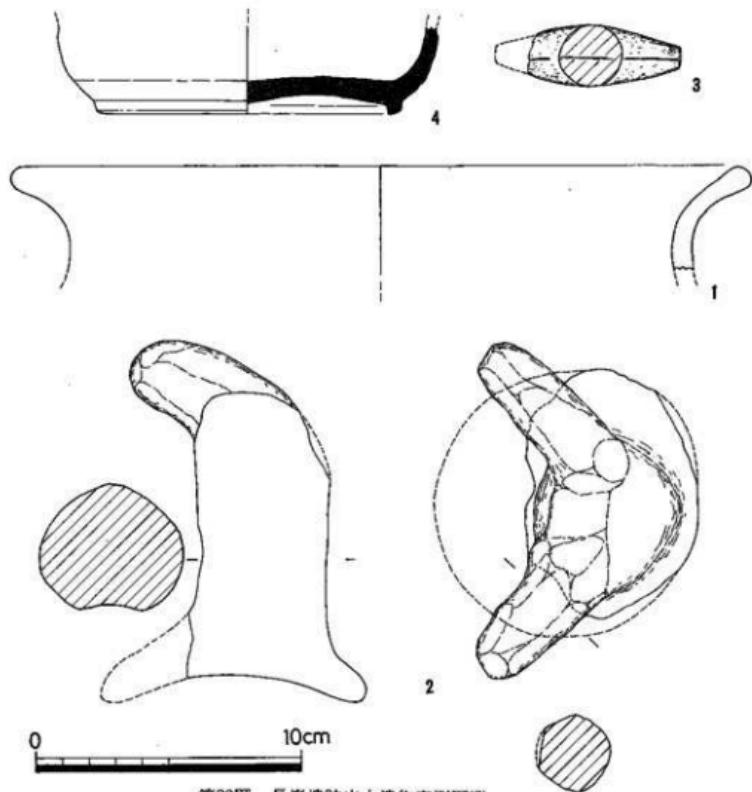


第19図 長峯遺跡土壤墓関係出土遺物実測図(2)

1は、須恵器の壺で器高16cm、底径7.1cm、頸部径4.5cm、口径8.5cmを計り口縁部を一部欠失する他はほぼ完形品である。頸部から口縁部にかけては器厚はうすくなり外傾するが口縁端部は逆に上方にひねる。体部は上半部で最大となり外面は体部最大径付近と底部近くをヘラ削り調整する。底部は中心部で2ミリの上げ底となり回転糸切り手法による切り離しを行なっている。この種の須恵器は、県内では類例がない。京都の平安京関係遺跡では、肩の丸い広口瓶あるいは長頸瓶と呼ばれているものが類似しており、平安時代のものとしてよい。

2～5は、器高4cm前後、口径10～12cm、口径6.4～7.0cm、底部から口縁部に向けて直線的に外傾し、底部は、いずれも回転糸切り手法による切り離しを行なっており、ほぼ均一化した作りものである。

こうした類例は、松江市古曾志遺跡群中の平安期の窯跡（古曾志1～3号窯）出土品中にも見られることからやはり平安時代のものと考えられる。
注14



第20図 長峯遺跡出土遺物実測図(3)

6～13は、鉄釘で最低6本認められる。完形品の8は、長さ7.3cm、基部で厚み4.5×6ミリを計るものである。

以上のことから、この土壙墓は平安期のものと考えられる。その他、第2調査区のG-3区表土中からは土師器の壺の口縁部が出土している。（第20図1）口径28cmを計り、内外面共に明褐色を呈し1ミリ以下の砂粒を多く含む。又、第3調査区の西区からは二又の土製支脚が発見されている。（第20図2）高さ13.8cm、胴部の厚み5cm、二又の厚み3cmを計る。やや小型の部類に属する。

同じ第3調査区の西区からは淡黄褐色の軟岩で加工された紡錘形石製品も発見されている。（第20図3）これは、残存長5.7cm、中央部の直径2.3cm、端部径8ミリを計る。横方向に幅0.5～1ミリ弱の細い沈線を1条刻む。年代は不明である。

IV 小 結

中竹矢後1号墳については、主体部となる埋葬施設が確認できなかったのは残念である。が一辺14.2m、高さ約1mの方墳であった。その構築時期については関係遺物が皆無であるので不明というしかない。

ここで問題としたいのは墳丘上や溝中から出土した須恵器、土師器、瓦片である。これらの殆んどは故意に破碎されて投棄された形跡があり、古墳が構築されて以来平安時代に至るまで数次にわたり墓前祭の如き祭儀が執り行なわれたのではないかと考えたが同様の例が最近あちこちで注意され始めてきたので今後さらに検討を進めていきたい。

本遺跡の南西約200mの至近距離に所在する才ノ崎遺跡では、I区、II区から大量の瓦片の出土がみられ、出雲国分寺と同文の軒平・軒丸瓦の出土と同寺に近いことからその廃棄物処理場としてこの性格づけが成されているが、I区II区は、低地に立地しておりもとは沼もしくは池であったと考えられているのに対し、中竹矢後1号墳は、低丘陵上に立地しており、わざわざ山上に瓦片等を単なるごみとして廃棄したとは思われない。やはり何らかの意味があるのだろう。

長峯遺跡の調査では弥生中期～後期前葉頃の堅穴住居跡を検出することが出来たが、調査例の少ない県内の住居跡研究上貴重な資料となりうるものである。

又、平安期の土塙墓については、県内では今回初めて確認されたもので副葬された土器と墓壇の造り方のよくわかる例として今後注目されよう。

本例とは違うが、火葬場=火葬墓として確認された中竹矢後遺跡のSK32は、本遺跡の南約300mの丘陵上にあるが、残念なことに時代を限定することが出来ない。

注1 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』昭和55年

注2 島根県教育委員会「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅳ 一島根県松江市山代町所在・西王寺跡」昭和60年3月

注3 島根県教育委員会文化課主事内田律雄氏に実見してもらい御教示を得たもの。

注4 松江市教育委員会が昭和60年度に調査を行ない、昭和61年度に報告書を刊行する予定。本古墳は長方形墓壇を有し、首玉とめのう製勾玉、刀子、土師器の高环を副葬する方墳。

注5 倉吉市教育委員会「上米積遺跡群発掘調査報告Ⅱ 一阿弥大寺地区」昭和56年3月

注6 鳥取県東伯郡大栄町教育委員会「向野遺跡・後谷遺跡発掘調査報告」1984・3

注7 鳥取県東伯郡大栄町教育委員会「上種第5遺跡発掘調査報告」1985・2

注8 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ(本文編)」1978・3

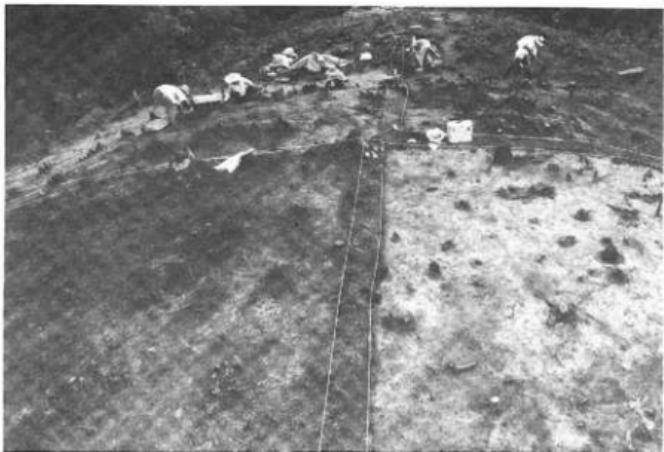
- 注9 注7と同じ。
- 注10 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会「国道9号線バイパス建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書IV」昭和58年3月
- 注11 島根県教育委員会「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」昭和55年3月
- 注12 松江市教育委員会「松江圏都市計画事業乃木本地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」1983
- 注13 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館「八雲立つ風土記の丘№33」昭和53年12月
- 注14 古曾志跡は島根県教育委員会が昭和60年度において調査したもので、類似土器については足立克己氏の御好意により実見させていただいた。



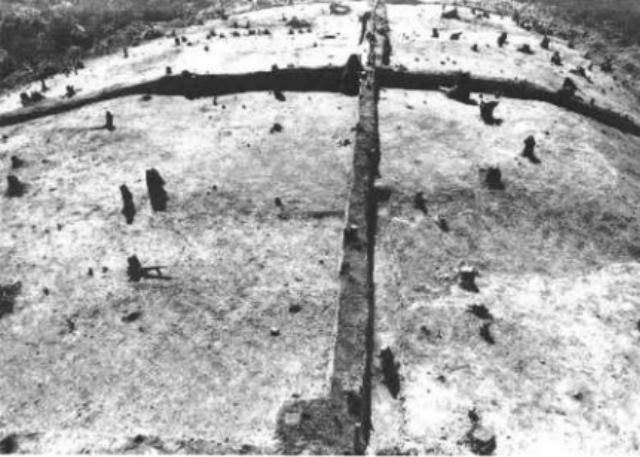
中竹矢後 1 号墳 長峯遺跡（西の丘陵）



遺跡遠景



中竹矢後 1 号墳
表土除去作業中



盛土と墳丘基盤の状況



溝の断面



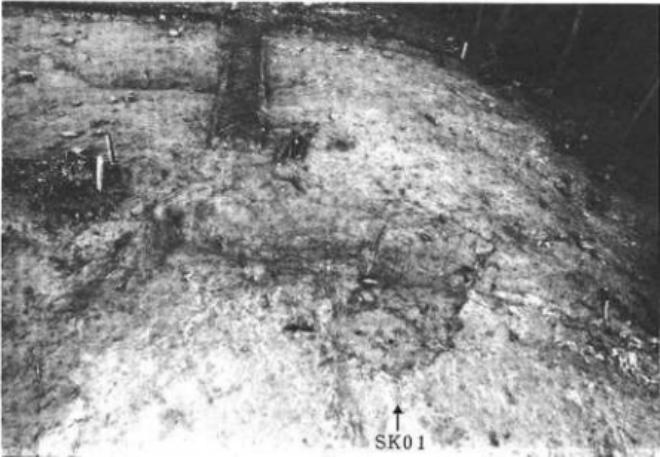
盛土除去後の墳丘基盤
(南からみる)



溝内瓦片出土状態



長峯遺跡近景
(東からみる)



SK01

↑
SK01



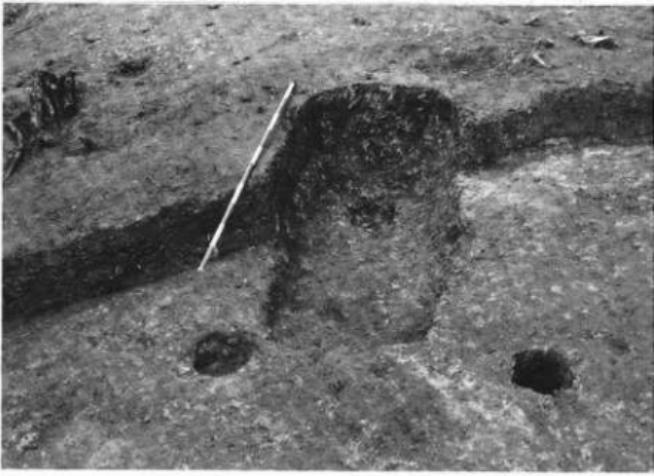
SK 01 挖り下げ状況
(- 10 cm)



SK 01



SK 01



SK 01 振り方



SK 01 内
須恵器壺出土状態



SK 01 内
土師器出土状態



S101検出状況



溝検出状況



S101の中央ピット
砥石出土状態

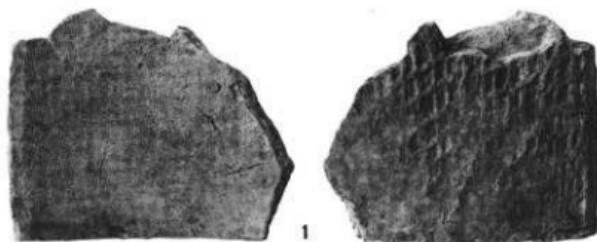


1		2	3
6		7	8
9	10	11	15
12	13	14	16
	17		18

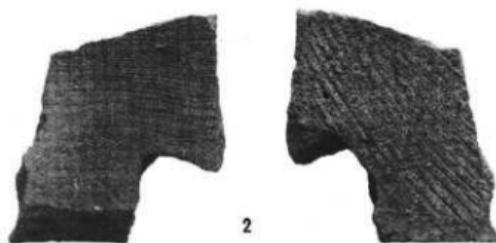
カマド片



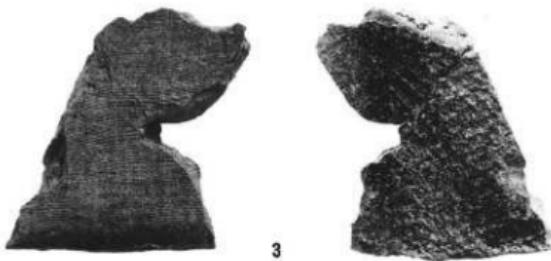
中竹矢後 1号墳出土遺物



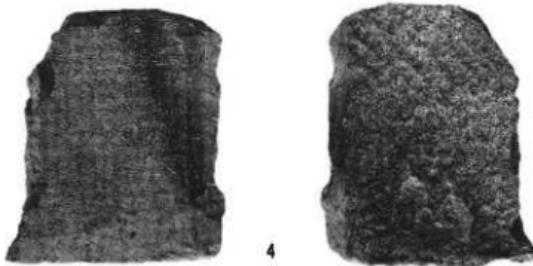
1



2



3

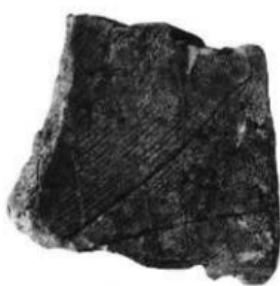


4

中竹矢後 1号墳出土瓦 (番号は実測図と同じ)



5



6



7



8



中竹矢後 1号墳出土瓦（番号は実測図と同じ）



9



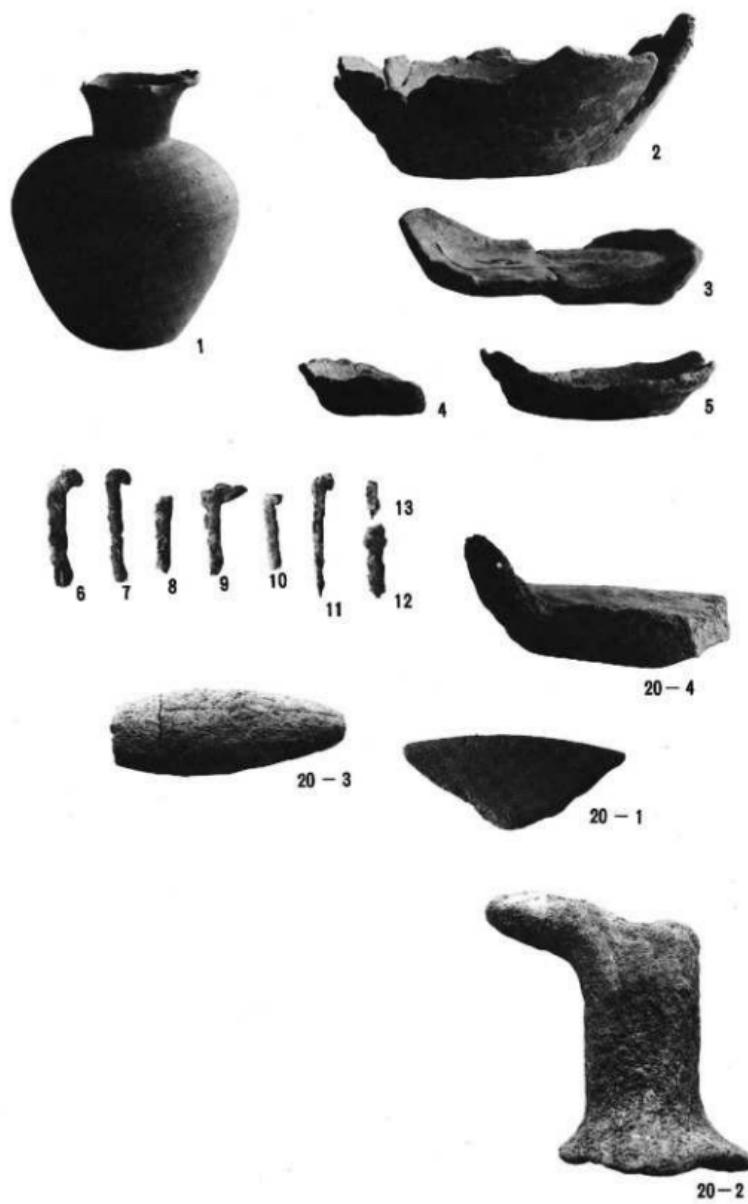
10

中竹矢後 1号墳出土瓦（番号は実測図と同じ）



		砾石 側面擦痕
砾石上面	砾石側面	砾石 側面擦痕

長峯遺跡 S101、SD01、SD02 出土遺物



長峯遺跡 SK 01 他出土遺物

中竹矢後1号墳
長峯遺跡

昭和61年3月発行

発行 松江市教育委員会

印刷 有限会社谷口印刷

松江市母衣町89